

水稻の生育状況と当面の対策

基本技術を励行して消費者に「おいしいお米」を届けよう！

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiku/index.html>

第 3 報
千葉県農林水産部
平成 25年 6月 26日

幼穂形成期を迎えた「コシヒカリ」、適期の穂肥施用を！

【生育概況】

全体的に生育は平年並～やや進んでおり、茎数は平年並～やや多めですが、日照不足により、軟弱徒長気味な生育であり、草丈が高く、葉色が濃いほ場が多くみられます。「コシヒカリ」は、間もなく穂肥の時期を迎えますが、施用時期や量に注意しましょう。

なお、葉色が濃く推移しており、梅雨期は「いもち病」などの病害が感染しやすい条件が続くので、ほ場をよく見回って早期発見と適期防除に努めましょう。

表 1 品種別の生育状況（6月25日現在）

品種	植付時期	生育進度	平年比		
			草丈	茎数	葉色
ふさおとめ	4月20日頃	並～やや早	並～やや高	やや多	やや濃
ふさこがね	4月20日頃	並～やや早	並～やや高	並～やや多	やや濃
コシヒカリ	4月20日頃	やや早	やや高～高	やや多	並～やや濃
	5月1日頃	やや早	やや高～高	並	並～やや濃
ふさのもち	4月20日頃	並	並	やや多	やや濃
	5月10日頃	やや早	やや高～高	並～やや多	並

※過去5か年の平均値との比較。ただし「ふさのもち」は過去3か年の平均値との比較。

表 2 「ふさおとめ」と「ふさこがね」の冷害危険期

品種	植付時期	幼穂形成期(月日)	冷害危険期予測(月日)
ふさおとめ	4月20日	6月16日頃	6月26日頃
ふさこがね	4月20日	6月18日頃	6月28日頃

表 3 「コシヒカリ」の幼穂形成期と冷害危険期の予測

品種	植付時期	幼穂形成期予測(月日)				冷害危険期予測(月日)
		県北	九十九里	内湾	県南	
コシヒカリ	4月20日	6月28日	6月25日	6月24日	6月23日	7月3日頃
	5月1日	6月30日	6月28日	6月27日	6月26日	7月6日頃

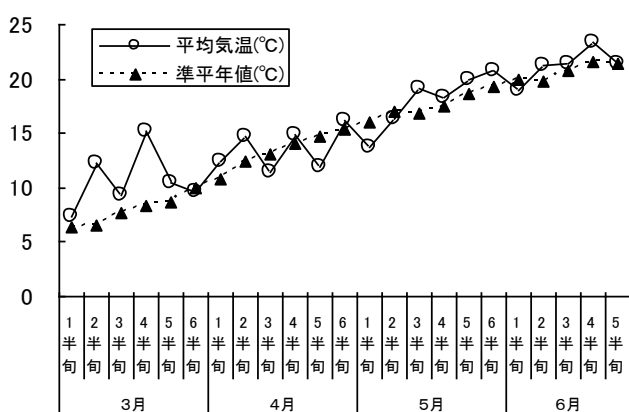


図1 平均気温の推移（アメダス、佐倉）

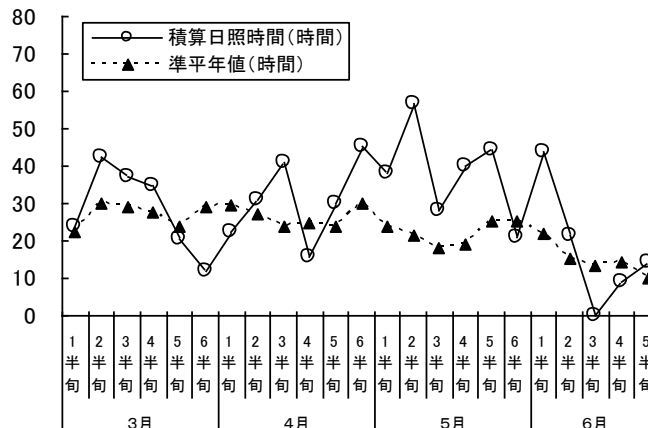


図2 日照時間の推移（アメダス、佐倉）

【 これからの管理のポイント 】

■ 「コシヒカリ」の幼穂を確認して適期穂肥に備えよう

○幼穂の確認の仕方

幼穂形成期は幼穂長 1mm（出穂 25 日前）の株が全体の 8 割に達した時点です。

「コシヒカリ」の穂肥の適期は幼穂長 10mm（出穂 18 日前）の時です。

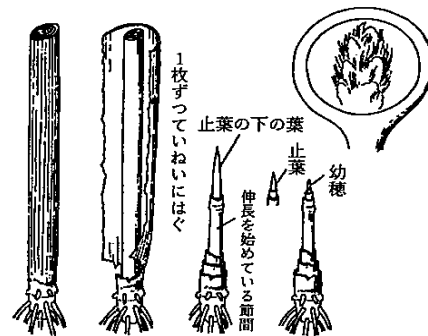


図 1 幼穂の確認方法

（出典：農文協 農業技術体系作物編 P134）

○生育に応じた適期穂肥の施用方法

「コシヒカリ」は倒伏しやすいので、穂肥の適期施用を図りましょう。葉色、茎数及び草丈から総合的に診断します。幼穂形成期の時点で、茎数が多かったり、葉色が濃かったりする場合は穂肥の減量や施用時期を遅らせます。ただし、遅くとも食味への影響のない出穂前 10 日まで（幼穂長 8 cm）には施用しましょう。

診断方法は表 4 を参照してください。

表 4 幼穂形成期における「コシヒカリ」の穂肥・倒伏軽減剤の要否判定

葉色 (SPAD 値) ×茎数/㎡	草丈 (cm)	予測される生育・収量	対策
16,000 以下	70cm 未満	倒伏は避けられるが、籾数が不足しやや減収となる。	穂肥の増量。又は時期を 2~3 日早める。
16,000 ~20,000	70~80cm	穂肥施用により目標どおりの生育が期待できる。	出穂前 18 日に、標準量の穂肥を施用する。
	70~80cm	穂肥施用による籾数確保は必要だが、穂肥施用によって稈長が伸び、倒伏が心配される。	穂肥と倒伏軽減剤とを組み合わせる。
20,000 ~27,000	75cm 未満	穂肥施用による倒伏の心配は少ないが、籾数過剰となり、乳白米の発生が心配される。	穂肥の施用量を減らす(窒素施用量 1~2kg/10a)か、時期を遅らせる。
	75~82cm	穂肥施用により籾数過剰となる。穂肥を施用しなくても稈長が伸び過ぎて倒伏が心配される。	穂肥は施用せず、倒伏軽減剤のみ施用する。

表 5 「コシヒカリ」の幼穂形成期の生育目標

草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉色 (カラースケール値)
70 以下	430~560	3.5~4.0

表 6 主な倒伏軽減剤

薬剤名	使用時期／使用回数	10a 当たり散布量	処理方法
ロミカ粒剤	出穂 25～10 日前まで／1 回	2～3kg	湛水散布
スマレクト粒剤	出穂 20～7 日前／1 回	2～3kg	湛水散布
ビビフルフロアブル	出穂 10～2 日前／1 回	75～100ml	茎葉散布

■ 水管理 ～全量基肥（一発肥料）栽培の場合も水管理は大切です～

○ 中干しから出穂後までの水管理

基本的な水管理は①～④のとおりです。特に「③」は自然由来のカドミウムの吸収を抑えるために必要な技術です。「安心・安全」な米作りのために注意して管理しましょう。

- ① 中干しは強過ぎないように、土が湿って足跡が残る程度
- ② 十分に中干しができたら、出穂 3 週間前までは間断かんがい
- ③ 出穂 3 週間前から出穂 2 週間後までは湛水管理
(幼穂を確認したら、入水を開始する。)
- ④ 出穂 2 週間後から出穂 25 日後までは間断かんがい

○ 低温時には湛水

幼穂形成期以降に平均気温 20℃以下の低温の持続が予想されるときは、冷害防止のために深水で湛水（保温）しましょう。

また、低温が予想される場合でも、穂肥の窒素と加里は施用しましょう。

表 7 低温時湛水深の目安

幼穂形成期（出穂 25 日前）から冷害危険期前（出穂 15 日前）	湛水深 10cm 程度
冷害危険期（出穂 15～10 日前）	湛水深 20cm 程度

■ 出穂 2 週間前までの雑草防除

農林総合研究センター発表の6月12日付け病害虫発生予報では、「カスミカメムシ類」の多発生が予想されています。出穂直前の畦畔雑草はカメムシ類の生息場所となるので、出穂2週間前頃までに畦畔雑草を刈取りましょう。

■ いもち病の防除

この時期はいもち病に注意が必要です。平均気温 20～25℃で曇雨天が続いて茎や葉の湿っている時間が長いときが感染しやすい条件です。葉いもち予防の粒剤は、発生する前に散布する必要があります。葉に病斑が多数見られるほ場では、予防効果と治療効果を兼ね備えた薬剤を直ちに散布しましょう。治療効果のある薬剤は、発生確認後の早い段階の防除で高い効果が期待できます。ほ場をよく見回って、早期発見に努めましょう。

薬剤は5ページの表 8を参照してください。

■ 稲こうじ病の防除

幼穂分化期～穂ばらみ期に降雨が多くて気温が低い年に発生が多くなります。

出穂前が防除時期です。 前年度に多発したほ場では5ページの表9を参照して薬剤防除しましょう。

■ 農薬の飛散防止

農薬の散布に当たっては、周辺への飛散を防止するため次に示す事項に注意しましょう。

- 風の弱いときに風向きに注意して散布する
- 散布の方向や位置に注意する
- ドリフト低減ノズルなど適切なノズルを用い、適正な圧力で散布する
- 適正な散布量で散布する
- 近接する住宅や作物の生産者等と連携する
- 緩衝地帯を設ける
- 遮蔽物を設ける
- 飛散しにくい農薬や剤型を選ぶ
- タンクやホースの洗浄を徹底する

現在の生育の様子



図4 ふさこがね（4月19日植え）
6月26日（千葉市緑区刈田子）の様子

生育進度はやや早く、やや徒長気味である。既に穂肥を施用した。
湛水管理を行っている。

表 8 いもち病の主な防除薬剤

作用性	薬剤名	使用時期／使用回数	使用時期／使用回数の注記	10a 当たり散布量
予防	オリゼメート粒剤	右記／2 回まで	葉いもちには初発 10 日前から初発時に、穂いもちには出穂 3～4 週間前（ただし、収穫 14 日前まで）に散布	3～4kg
	クタシン P 粒剤	右記／2 回まで	葉いもちには初発 7 日前から初発時に、穂いもちには出穂 20～7 日前に散布	3～5kg
	コラトップ粒剤 5	右記／2 回まで	葉いもちには初発 10 日前から初発時に、穂いもちには出穂 30～5 日前に散布	3～4kg
	// ジャンボ	右記／2 回まで	葉いもちには初発 20 日前から初発時に、穂いもちには出穂 30～5 日前に散布	10～13 個
	ブイゲット粒剤	収穫 45 日前まで／2 回まで	葉いもちには初発 20～7 日前に湛水散布	3kg
	フジワン粒剤	収穫 30 日前まで／2 回まで	葉いもちには初発 10～7 日前に、穂いもちには出穂 30～10 日前に湛水散布	3～5kg
	ルーチン粒剤	収穫 30 日前まで／2 回まで	湛水散布する。	1kg
	ラブサイド粉剤 DL	収穫 7 日前まで／3 回まで		3～4kg
予防・治療	イモチエース粒剤	収穫 35 日前まで／1 回まで		3kg
	カスラブサイド粉剤 DL	穂揃期まで／2 回まで		3～4kg
	ダブルカットフロアブル 1000 倍液	穂揃期まで／2 回まで		60～200 リットル
	ノンプラス 粉剤 DL	収穫 21 日前まで／2 回まで		3～4kg
	// フロアブル 1,000 倍液	収穫 21 日前まで／2 回まで		60～150 リットル
	ブラシン粉剤 DL	収穫 21 日前まで／2 回まで		3～4kg
	// フロアブル 1,000 倍液	収穫 21 日前まで／2 回まで		60～150 リットル
治療	カスミン粉剤 DL	穂揃期まで／2 回まで		3～4kg
	// 液剤 1,000 倍液	穂揃期まで／2 回まで		注

※散布後 7 日間は止水する。 注：フロアブル剤、液剤の 10a 当たりの散布量の目安は、本田初～中期：100～120 リットル、穂ばらみ期・出穂期：120～150 リットル。

表 9 稲こうじ病の主な防除薬剤

薬剤名	使用時期／使用回数	10a 当たり散布量	備考
モンガリット粒剤	収穫 45 日前まで／2 回まで	3～4kg	出穂 3～2 週間前に、必ず湛水した水田に処理し、その後 7 日間は止水する。
ブラシンフロアブル 1,000 倍液	収穫 21 日前まで／2 回まで	60～150 リットル	
ブラシン粉剤 DL	収穫 21 日前まで／2 回まで	4kg	
ラテラ粉剤 DL	収穫 14 日前まで／3 回まで	3～4kg	
撒粉ボルドー粉剤 DL	出穂 10 日前まで／－	3～4kg	
Z ボルドー粉剤 DL	出穂 10 日前まで／－	3～4kg	

※散布後 7 日間は止水する。

適正な施肥で健全な稲の栽培に取り組みましょう

～加里を補い、放射性セシウムの吸収抑制を図りましょう～

窒素、リン酸、加里は稲の生育に重要な肥料成分です。

しかし、近年、加里の土壌中成分量が不足している例が見受けられます。加里を補い、健全な稲の育成に努めましょう。

中間追肥や穂肥での加里施用は、米の放射性セシウム吸収抑制対策にも効果的です。

<ポイント> 適正量の加里肥料を施用しましょう！

県の加里の施用基準量は、基肥 6～8kg/10a、穂肥 1～3kg/10a です。

加里を施用することによって、放射性セシウムの稲への吸収を抑制することができます。

なお、倒伏を防ぐため、窒素は適正量とします。

特に、土壌中の加里含量が少ないことが見込まれる以下の水田では、穂肥より効果の高い中間追肥で加里を施用しましょう。なお、中間追肥を行わなかった場合は、穂肥で加里を施用しましょう。

- ①倒伏を回避するため、基肥の施用量を控えた水田
- ②一発肥料のみの施用で穂肥分の加里が不足している水田
- ③耕畜連携等により水田から稲わらを持ち出し、堆肥を入れなかった水田
- ④土壌に含まれる加里が少ないと思われる（砂質）水田

加里肥料の施用量

稲は生育期間を通して、10kg/10a程度の加里を必要としています。
不足分の加里成分を適量追肥してください。

例1) 一発肥料のみ施用している場合

穂肥分の加里成分(3kg/10a)を補います。

成分から換算すると ・塩化加里 : 5kg/10a 又は
・ケイ酸加里 : 15kg/10a となります。

例2) 水田から稲わらを持ち出している場合

稲わら分の加里成分(9kg/10a)を補います。

成分から換算すると ・塩化加里 : 15kg/10a 又は
・ケイ酸加里 : 45kg/10a となります。

※塩化加里の方が速効性があります。